指導変革の軌跡 No.291

校内研修

生徒が主体性を発揮できる学校を目指し、対話的で探究的な教員研修を実施

石川県立大聖寺高校

1分で分かる軌跡

入学者数の減少が以前から課題だった石川県立大聖寺高校。そうした中でも進路指導に力を入れ、大学進学実績を維持しつつ、学校の魅力化を模索してきた。そこで弥久保悦朗校長が目指す方針として打ち出したのが、「生徒を主語にした学校」だ。そしてそれを実現するための方策として、教師同士の対話を通じて考える校内研修「大人の探究」を実施。その結果、教師間で同僚性が高まり、学校の魅力を向上させるための複数の実践が行われた。

#生徒を主語にした学校
#教師が学校づくりを探究

学校概要

設立 1911（明治44）年
形態 全日制／普通科／共学
生徒数 1学年約160人
2023年度卒業生進路実績
国公立大は、富山大、金沢大、福井大、信州大、名古屋大、神戸大、広島大、富山県立大、石川県立看護大、石川県立大、公立小松大、福井県立大などに35人が合格。私立大は、青山学院大、日本大、同志社大、立命館大などに延べ185人が合格。短大・専門学校進学19人。就職4人。

校長
弥久保悦朗
やくぼ・えつろう
同校に赴任して2年目。

企画推進室長
髙野英樹
たかの・ひでき
同校に赴任して7年目。数学科。

生徒支援課長
山本潤平
やまもと・じゅんぺい
同校に赴任して6年目。保健体育科。

3学年担任
山本紳二
やまもと・しんじ
同校に赴任して6年目。地理歴史・公民科。

企画推進室
稲村　竜
いなむら・りょう
同校に赴任して8年目。理科（物理）。

教務課
秋山拓也
あきやま・たくや
同校に赴任して2年目。数学科。

変革の背景

大学進学実績重視から「生徒を主語にした学校」へ

石川県立大聖寺高校は、毎年40～50人の国公立大学合格者を輩出する地域の進学校だ。しかし、ここ数年は少子化の影響で入学者数が減少。特進クラスや難関クラブ（＊1）の設置などによって大学進学実績は維持してきたが、それでも定員割れとなる年があったと、企画推進室長の髙野英樹先生は語る。

「校長を始め、教師が積極的に中学校を訪問して大学進学実績をアピールしましたが、入学志願者は増えませんでした。大学進学実績だけで学校の魅力を訴求することに限界を感じていました」

2023年度に赴任した弥久保悦朗校長は、自校の魅力を中学生に直接伝えようと、市内の中学校を訪問して説明会を実施した。そんな中、23年10月に、弥久保校長と髙野先生はNITSのコア研修（＊2）を受けた。3日間の研修では、小・中学校、高校の教師が4人1組で、学校の課題について対話と振り返りを毎日繰り返した。その経験が2人の意識を変え、学校の魅力化の方向性を大きく転換する機会になった（図1）。

「それまでの私たちは、『入学定員を充足させるためには、どのような魅力が自校に必要か』といった視点で学校改革を捉えていました。しかし、コア研修を通して、学校の魅力は教師がつくるものではない。生徒が主体性を発揮できる学校になることで本校の魅力化が図れると気づいたのです」（弥久保校長）

図1　弥久保校長のコア研修の振り返り

（前略）具体的には当初、「どのようにして本校の魅力化を図るか」を探究課題に設定する予定だったが、学び手を主語とし、生徒が真ん中に位置づけられる探究課題となるよう、中森一郎教授（福井大学教職大学院）から助言をいただき、「どうすれば生徒が主体性を発揮できる学校になるか」に探究課題を改めた。生徒が中心となる学校づくりを目標にすることは、学習指導要領の「主体的な学びの実現」に通じるものである。つまり、目指すゴールは「生徒が主体的で生き生きとした姿になる」ことであり、それは「主体性を発揮」している状況にほかならない。（後略）

※学校資料を基に編集部で作成。

変革の一手①

「生徒の主体性の発揮」をテーマに教師が探究

コア研修を機に、弥久保校長は学校の魅力化の方針として「生徒を主語にした学校」を掲げた。その実現に向けて、自分が受けたコア研修のように、学校の課題について教師同士で対話をし、具体策を模索する研修を自校で実施することにした。

「本校には、若手教師でも学校が抱える問題の解決に向けた新しい取り組みに挑戦することができる文化がありますが、個々の実践にとどまっていました。そこで、先生方が学校改革への思いを同じにする場をつくることで、学校全体で足並みをそろえて改革を進めることができるのではないかと考えました」（髙野先生）

それが校内研修「大人の探究」だ。教師は①授業、②部活動・生徒会活動、③探究学習、④進路学習の中から自分が探究したいカテゴリーを選択し、カテゴリーごとに3～4人から成るグループを組む。そして「どう

＊1　難関大学を志望する1～3年生から成る縦割りのクラブ。1・2年次合同講義、特別講師の講演や座談会などを実施。　＊2　NITS（独立行政法人教職員支援機構）が主催する研修。実践の振り返りや対話、知識の習得を重ねながら、課題を探究する力や、探究的な学びをデザインし、マネジメントする力を養う。教諭等が参加する「1年コース」と、管理職と教諭等が2人1組で参加する「2年コース」があり、弥久保校長と髙野先生は2年コースを受講中。4人1組の対話は、コア研修の最初に実施された3日間の集合研修で行われた。

すれば生徒が主体性を発揮できる学校になるか」を探究テーマに、グループ内で課題を設定して取り組み、結果を共有するという流れの研修だ。

「大人の探究」の進め方（**図2**）は、弥久保校長と髙野先生、そして各カテゴリーのファシリテーターを務める4人の教師と一緒に練った。「部活動・生徒会活動」を担当した山本潤平先生は次のように語る。

「私は普段から、生徒会の生徒が自ら自校のよさをSNSで発信し、学校説明会で中学生に自校の魅力を熱心にアピールする姿を見てきました。そうした先輩に憧れて本校を志望する中学生は少なくありません。生徒が主体性を発揮できる学校を目指すという方針は、学校の魅力を高めることにつながると感じました」

新たな校内研修に、教師からは戸惑いの声も上がった。そこで、弥久保校長は「大人の探究」の趣旨を丁寧に説明するとともに、「まずは一度、挑戦してみよう」と呼びかけた。

そうした中で行われた1回目の「大人の探究」。どのグループも活発な対話が交わされた。例えば、「探究学習」のグループでは、「総合的な探究の時間」について、生徒が課題を自分事として捉えられず、意欲が続かないことや、教師側が課題設定における支援に十分な時間や労力を割けていないのではないかといった指摘があった。やらされ感が探究学習に影響しているという点についてはまず、1年次の探究学習に対する生徒の熱量が高まるよう、指導内容を見直すこととした。

「授業」のグループでは、生徒の学習意欲の向上について様々な意見が出たと、「授業」のカテゴリーを担当した秋山拓也先生は語る。

「多様な視点で対話が行われるよう、担当教科が異なる教師でグループを作りました。生徒の学習意欲を喚起するために生徒主体の活動を増やしたいが、限られた授業時数の中で、そういった活動を行う時間を設けること自体が難しいなどと、教師が持っている理想や葛藤が赤裸々に語られました」

1回目の「大人の探究」実施後に取ったアンケートでは、全員が「有意義だった」と回答。「あっという間の2時間だった」「意見を共有することで、自分の考えが深まった」といった声が寄せられた（**図3**）。

「ここ数年、働き方改革やコロナ禍の影響で、教師同士がじっくり語り合う場がありませんでした。どの教師も、自分の胸の内を明かしたいという思いを持っていたのだと思います。対話の大切さを改めて感じました」（髙野先生）

図2

校内研修「大人の探究」概要

●**探究テーマ**　「どうすれば生徒が主体性を発揮できる学校になるか」

●**2024年度末の学校の姿**　生徒が学校の魅力を誰かに自慢したくなる学校

●**進め方**　生徒が主体性を発揮する場面として、①授業、②部活動・生徒会活動、③探究学習、④進路学習のカテゴリーを設定。教師はいずれかのカテゴリーを選択し、カテゴリーごとに3～4人から成るグループを組む。探究テーマに基づいた課題をグループ内で設定して取り組み、その結果を共有する。

1．1回目の研修でグループごとに課題を設定
2．3学期に、設定した課題に取り組む
3．2回目の研修で取り組みの結果を共有

●**第1回　事前課題（11月中に職員会議で告知）**

「私が本校で大切にしてきたこと」「今、本校が組織的にチャレンジしていることは何か。その中で私は何に取り組んでいるか」「私が本研修に期待していること」を文章でまとめる。

●**第1回の進め方　（12月中旬に3日間、1日2時間で実施）**

1日目　事前課題を基に、1人約20分間で各自の考えを発表し、質疑応答を行う（**写真**）。全員の発表を踏まえて、各自、気づきや振り返りをまとめる。

2日目　1日目の振り返りを各自が発表（発表と質疑応答1人約15分間）。他者との対話から気づいた点を含めて各自でまとめ、それまでの活動を踏まえて、3学期に取り組む課題をまずは個人で考える。

3日目　2日目の振り返りを共有した後、2日目に続き、3学期に取り組む課題を各自で考える（必要に応じて、グループ内で対話する）。各自が考えた課題をグループ内で共有し、グループの課題を設定。それを紙に書き、最後に全体発表を行う。

写真　第1回「大人の探究」の様子。

※学校資料を基に編集部で作成。

図3

第1回「大人の探究」の振り返り（抜粋）

- 3日間では足りなかったが、それでよいと思った。残ったモヤモヤを実践につなげて、まずやってみる3学期にしたい。
- 問題を1人で抱え込むことは、問題の解決はおろか、課題の洗い出しさえも難しいことを改めて感じた。
- この研修を経験して、生徒がいかに短い時間で探究しているかを実感した。正解が1つではない課題をみんなで考えることや、自分及び他者との対話の大切さ、自分の考えを他者に伝える難しさなど、いろいろな学びを得ることができた。
- 腹を割って話し合えてワクワクした。私たちに必要なのはやはり時間なのだと思った。きっと生徒にも時間が必要だろう。

※学校資料を基に編集部で作成。

変革の一手②

課題に基づき、活動の改善や新たな活動を実施

3学期は1回目の「大人の探究」で設定した課題に取り組み、その成果が、3月に実施した2回目の「大人の探究」で共有された。例えば、「進路学習」のグループでは、面談週間「出そう自分、知ろう自分」を実施した。全教師が授業や部活動などで接点のない生徒3人ほどと面談し、その内容を「Classi」（＊3）の生徒カルテに入力して教師間で共有した。「進路学習」を担当した稲村竜先生は、新たな活動の意図をこう説明する。

『大人の探究』の中で、『あまり接点のない教師になら、生徒は普段とは違う自分を出せて、生徒把握がより深まるのではないか』という提案があり、実践しました。実際、担任や部活動の顧問が知らない一面を見せる生徒がいました。教師と生徒が互いに知っている関係が広がれば、学校の雰囲気がさらによくなるのではないかといった期待もありました」

「授業」のグループでは、日本史担当の教師が、講義型の授業と生徒主体の調べ学習の授業のどちらがよいか、生徒に取ったアンケートの結果を発表した。生徒の選択は半々だったが、今後は生徒主体の活動を増やしつつ、知識を習得する学習もバランスよく行うことが報告された。

変革の成果と展望

教師と生徒の対話の場「探究@SEIKO」を開始

対話的で探究的な教員研修「大人の探究」は24年度、教師と生徒の対話の場「探究@SEIKO」（＊4）へと進化した。23年度の終業式で「大人の探究」の様子の動画を見せて生徒に参加を呼びかけると、新2・3年生の約20人から参加希望があった。事前アンケートでは、「学校生活をより快適にしたい」「自分の価値観を広げたい」といった期待が寄せられた。

「探究@SEIKO」でも4つのカテゴリーから探究したいカテゴリーを選び、生徒と教師が対話を行った。

「進路学習」では、自習用に教室を開放する「土曜自習」について、「自由に話し合える教室」「教科ごとの教室」など、目的に応じた教室を設けてはどうかと、生徒からアイデアが出された。「探究学習」を担当した山本紳一先生は、生徒の変化をこう語る。

「探究する教師の姿を見て、この学校は自分の意見を聞いてくれるといった安心感や期待感を持つ生徒が増えてきています。普段は物静かな生徒が『探究@SEIKO』の場で熱心に意見を述べるなど、生徒の新たな面を見ることもできています」

今後の課題は取り組みの精選だ。

「『大人の探究』によって同僚性が高まり、生徒を主語とする学校を目指す共通認識が教師間で持てました。新たな挑戦をする教師も増えています。そうしたよい面を維持しつつ、校務量が増えないよう、取り組みを精選することが課題です。教師も生徒も幸せな学校を今後も目指していきます」（弥久保校長）

ベネッセが見た軌跡

生徒を主語にした対話が生む、地域拠点校の新たな伝統

「大人の探究」の中で、先生方が生徒を主語に対話し、話が行き詰まった時は「生徒はどう感じるか？」と、必ず生徒の目線に立ち返っていたことがとても印象的でした。先生方それぞれが持つモヤモヤやワクワクが対話を通じて共有されることで、その話題に関連する書籍を読んで翌日の対話に生かしたり、生徒にアンケートを取って実態を把握したりと、新たなアクションも生まれていました。こうすればうまくいくといった正解がないからこそ、先生方自身が生徒の目線で「こうしてみたい！」と思うアイデアを、対話を通じて共有できたことが大きな価値だったのかもしれません。目の前の生徒を主語にした対話からは、大聖寺高校の新たな伝統が生まれ続ける予感がしております。

これからも北陸地域の先生・生徒・学校の新たな挑戦を後押しできるよう、全力で支援させていただきます！

(株) ベネッセコーポレーション北陸支社
石川県立大聖寺高校担当　山田章浩

＊3　株式会社ベネッセホールディングスとソフトバンク株式会社の合弁会社である Classi 株式会社が提供する、学校教育でのICT活用を総合的に支援するサービス。　＊4　学校名の「大聖寺」から同校が「聖高（せいこう）」と呼ばれていることにちなんで命名された。